室町期歌会資料集成稿―釈文と略解題―(三)

石澤一志・酒井茂幸
武井和人・日高愛子

【緒言】

本連載は、多くが未刊・未整理のまま残されてゐる室町期歌会資料（及びそれに関連するもの）を、広く学界に紹介することを意図としてゐる。

今回の小論では、宮内庁書陵部図書寮文庫蔵『禁裏御会和歌』（五〇一―二九〇）に所収される以下の六度の歌会（掲出は底本所収順）の釈文を掲げ、併せて略解題を付した。

1 永享十年二月二十八日内裏和歌御会
2 永享十年四月十日禁裏月次当座御会（初度）
3 永享十年四月十六日内裏月次当座御会（月次御哥第二度）
4 永享十年四月二十八日内裏月次当座御会（月次御哥第三度）
5 永享十年五月十日内裏月次当座御会
6 永享十年五月十九日内裏月次当座御会

当該歌会資料の釈文、略解題の礎稿作成者を（　）に入れて示した。ただし内容に関しては、著者相互に検討してゐる。

釈文にあたり、以下の方針に従つた。

(1)漢字は原則として通行の字体に統一した。

(2)丁移りを、「一・」一一、の如く示した。

(3)上句と下句の間に、一字分空白を設けた。

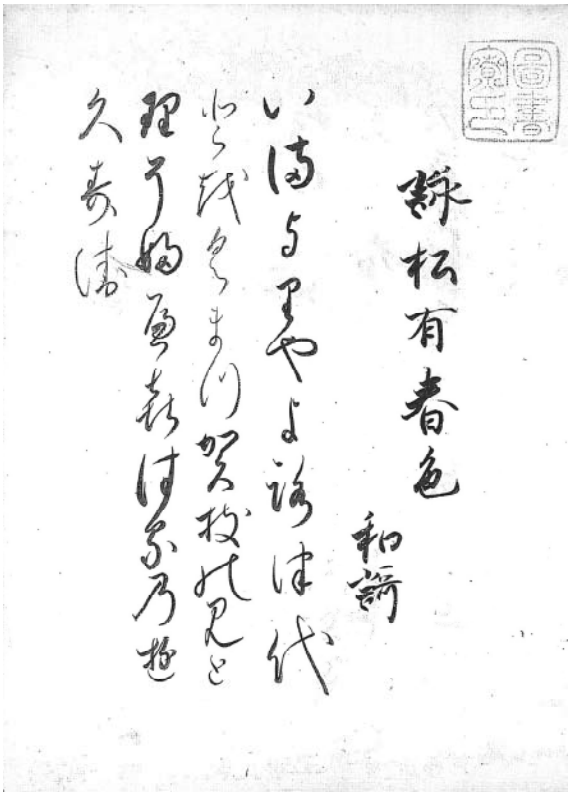
(4)和歌は原則として一行書に統一した。ただし懐紙を模写したと目される場合などは、出来るだけ底本の原形を保存した。

(5)**1 永享十年二月二十八日内裏和歌御会**に関しては、親本（懐紙〔乃至懐紙ノ模写〕）の表記、字母などに至るまで忠実に転写してゐると目されるので、例外としてまづ図版を掲げ、続けて釈文を掲げた。

底本の書誌、各歌会の成立事情等は、略解題を参照されたい。

小論は、ＪＳＰＳ科研費二六三七〇二〇〇の助成を受けたものである。

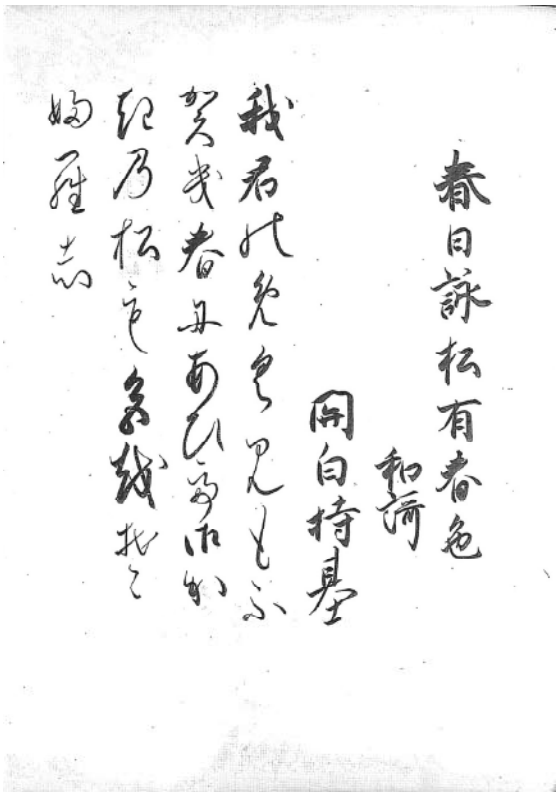
（武井和人）



詠松有春色

和謌

いまよりやよろつ代
とをくまつか枝のみと
りそふへきはるのゆ
くすゑ

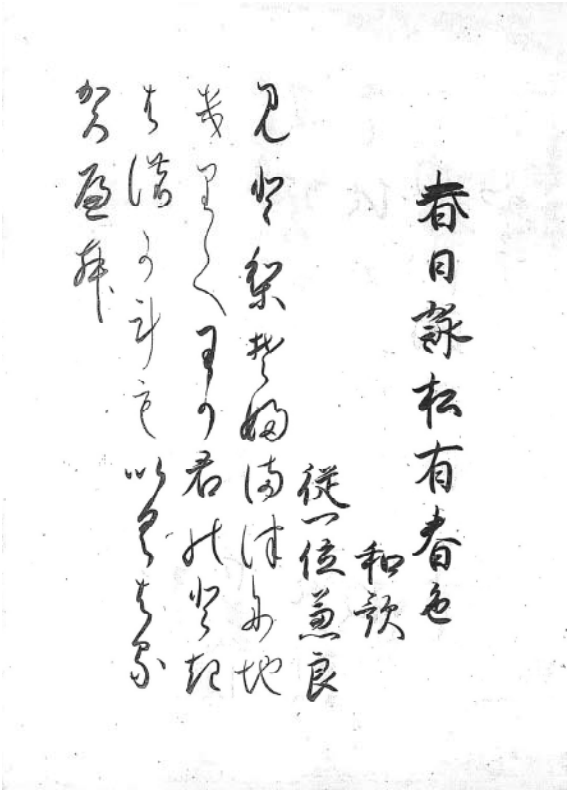


春日詠松有春色

和謌

関白持基

我君のめくみもふ
かき春にあひて御か
きの松も色をそ
ふらし」一

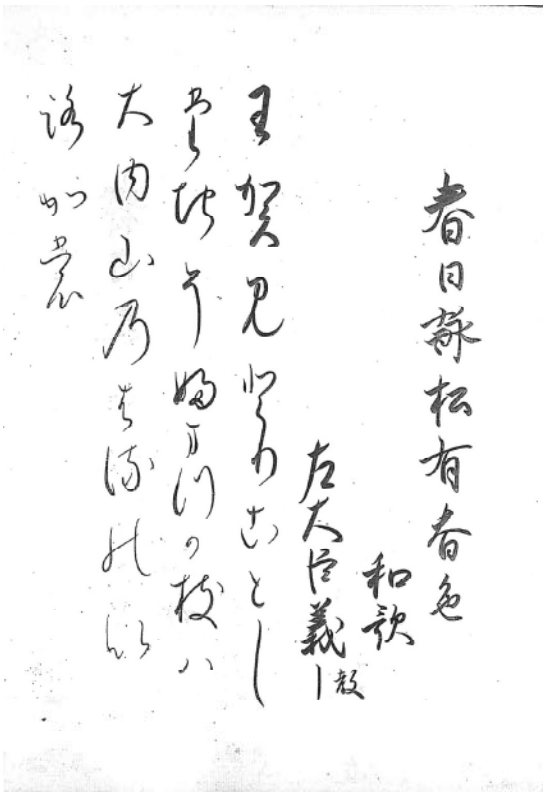


春日詠松有春色

和歌

従一位兼良

みとりそふまつにち
きりてわか君のとき
はのかけもいくはる
かへむ

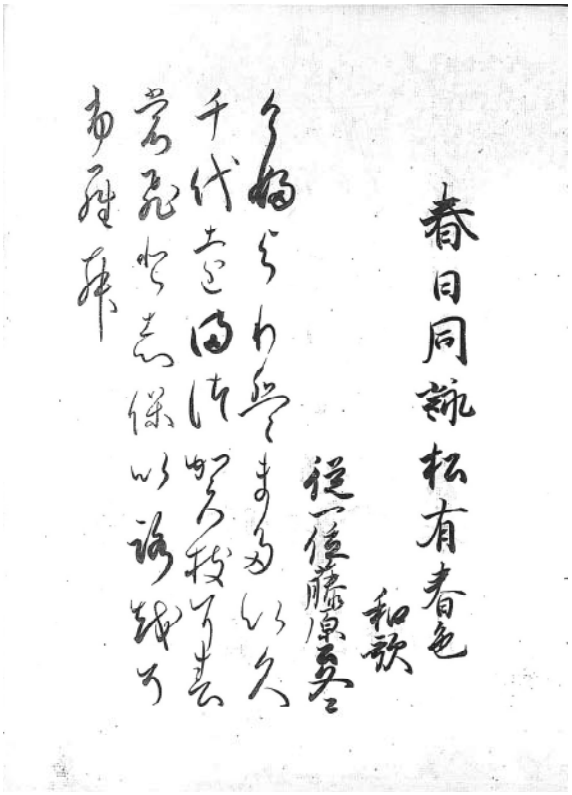


春日詠松有春色

和歌

左大臣義教

わかみとりことし
たちそふまつか枝は
大内山のはるのい
ろかも」二

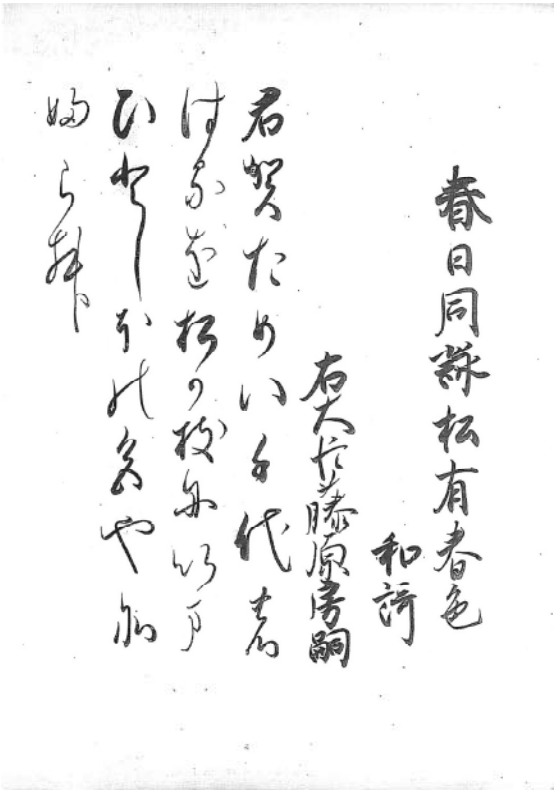


春日同詠松有春色

和歌

従一位藤原公冬

けふよりはまたいく
千代をまつか枝に春
もひとしほいろをそ
ふらむ

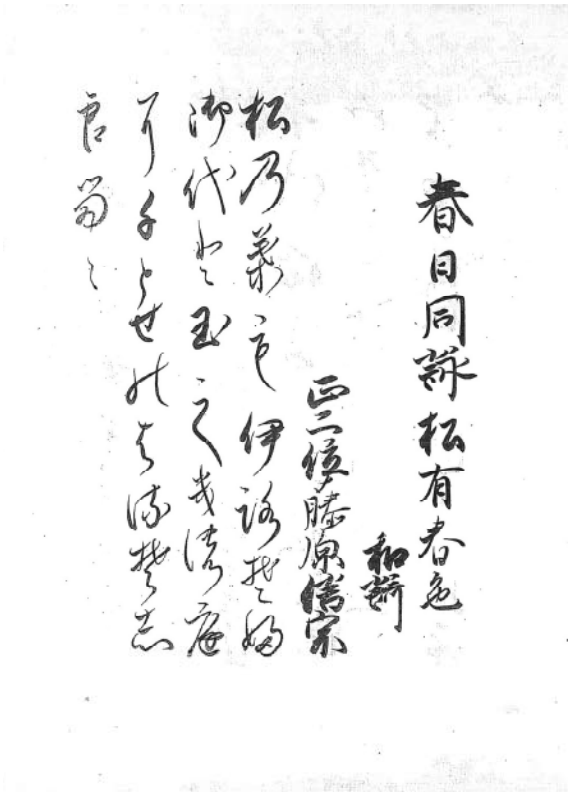


春日同詠松有春色

和詩

右大臣藤原房嗣

君かため八千代の
はるを松か枝にいま
ひとしほの色やそ
ふらむ」三

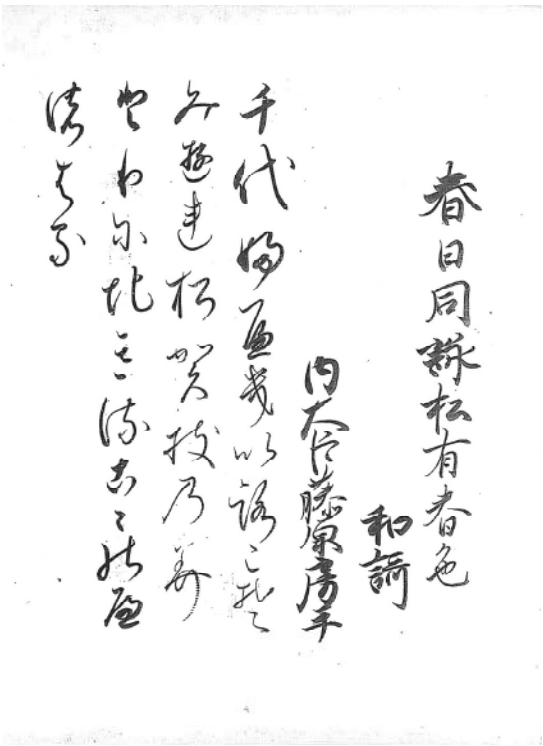


春日同詠松有春色

和謌

正二位藤原信宗

松の葉もいろそふ
御代と玉しきの庭
に千とせのはるそし
らるゝ

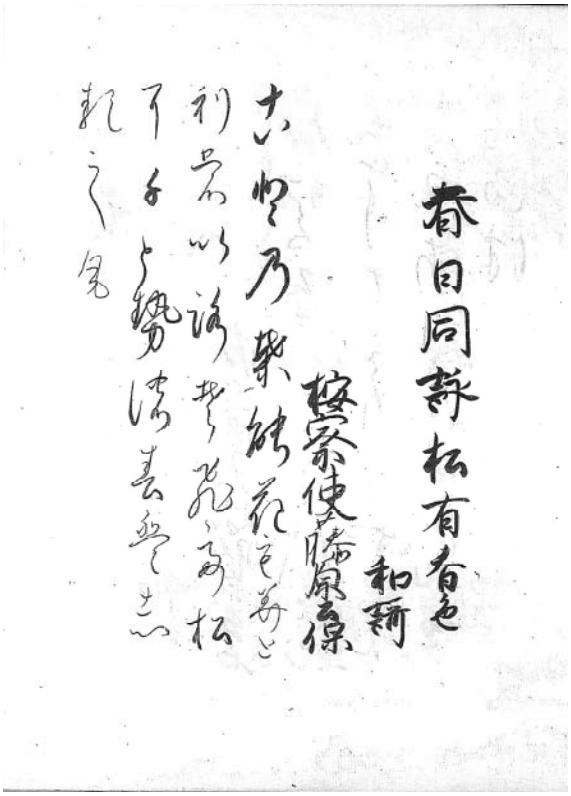


春日同詠松有春色

和謌

内大臣藤原房平

千代ふへきいろこそ
みゆれ松か枝のみ
とりにちきるこゝのへ
のはる」四

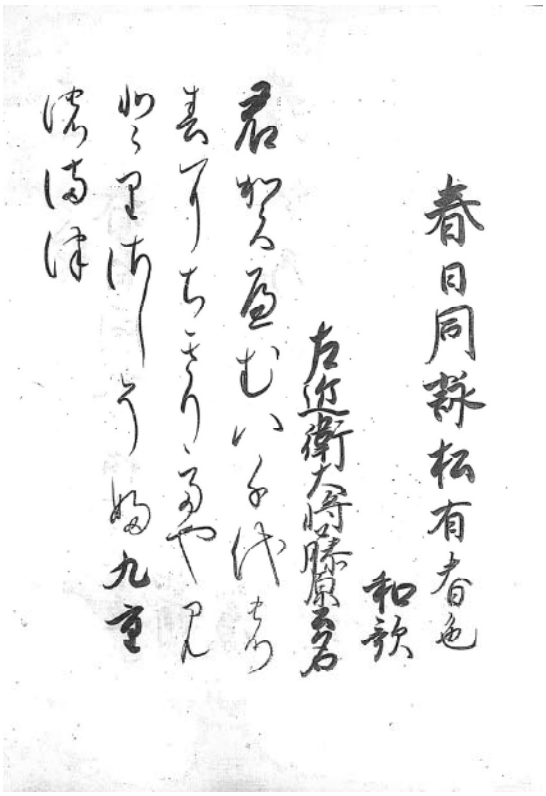


春日同詠松有春色

和謌

按察使藤原公保

ことの葉の花もみと
りもいろそひて松
に千とせの春はし
るしも

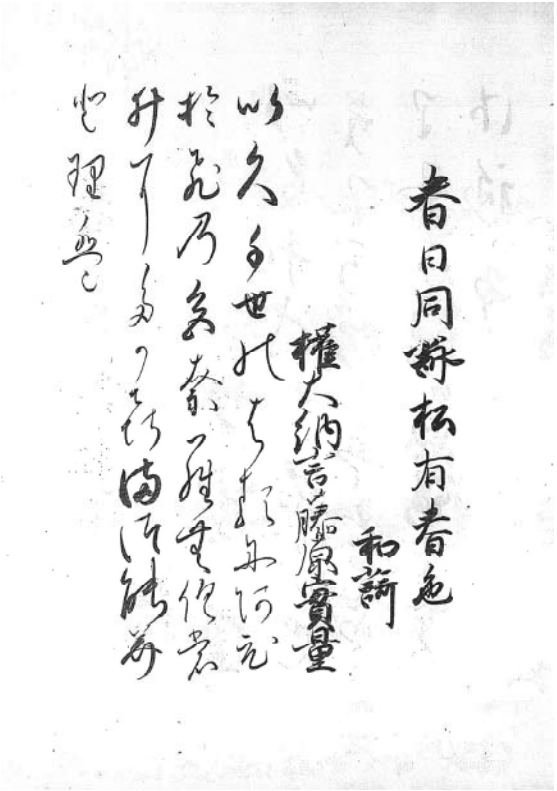


春日同詠松有春色

和歌

左近衛大将藤原公名

君かへむ八千代の
春にちきりてやみ
とりさしそふ九重
のまつ」五

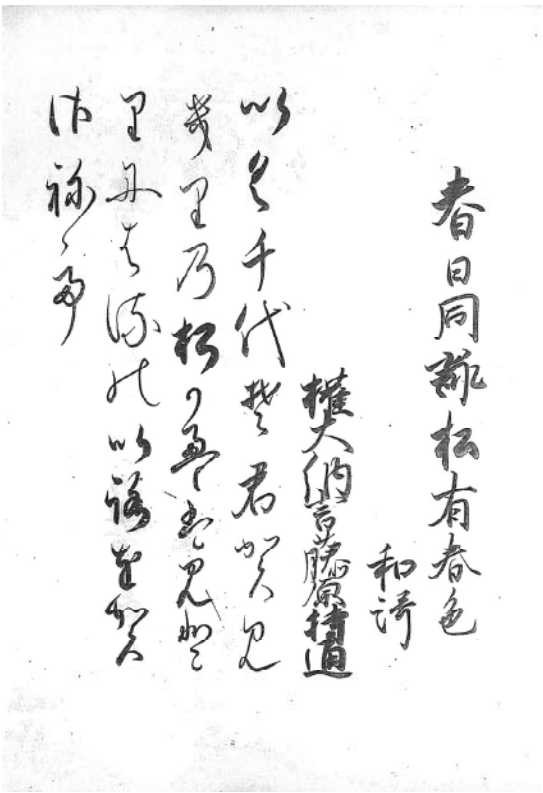


春日同詠松有春色

和謌

権大納言藤原実量

いく千世のはるにあひ
おひの色ならむくも
ゐにたかきまつのみ
とりは

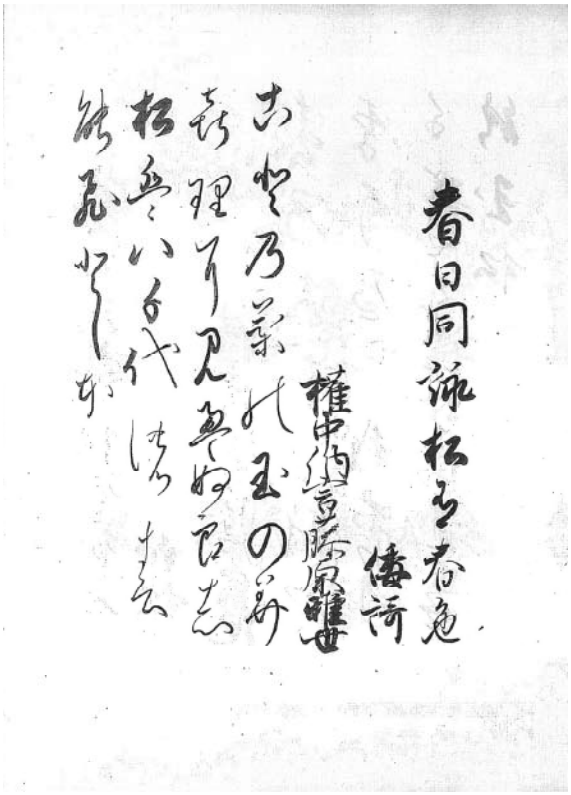


春日同詠松有春色

和謌

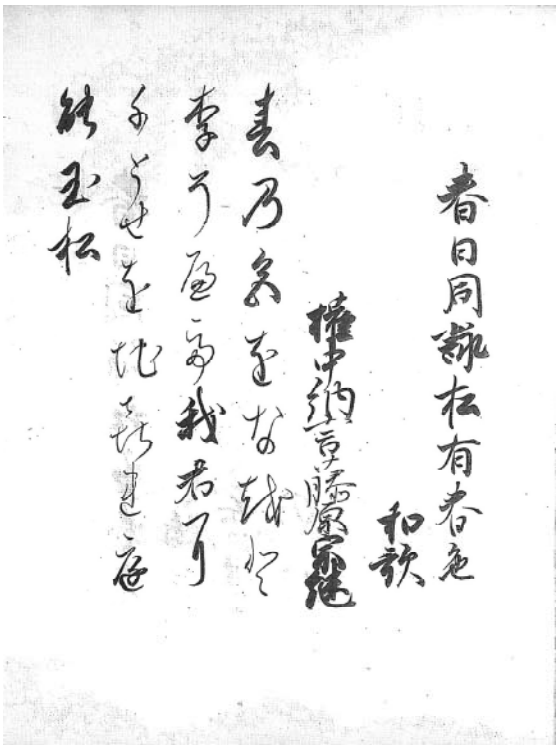
権大納言藤原持通

いく千代そ君かみ
きりの松かえはみと
りにはるのいろをか
さねて」六



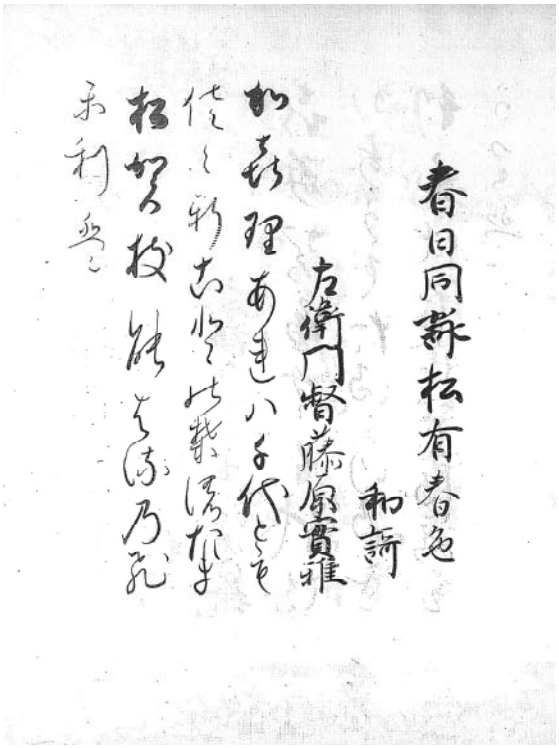
春日同詠松有春色
倭謌
権中納言藤原雅世

ことの葉の玉のみ
きりに見えぬらし
松は八千代の春
のひとしほ



春日同詠松有春色
和歌
権中納言藤原宗継

春の色をなをと
りそへて我君に
千とせをちきれ庭
の玉松」七

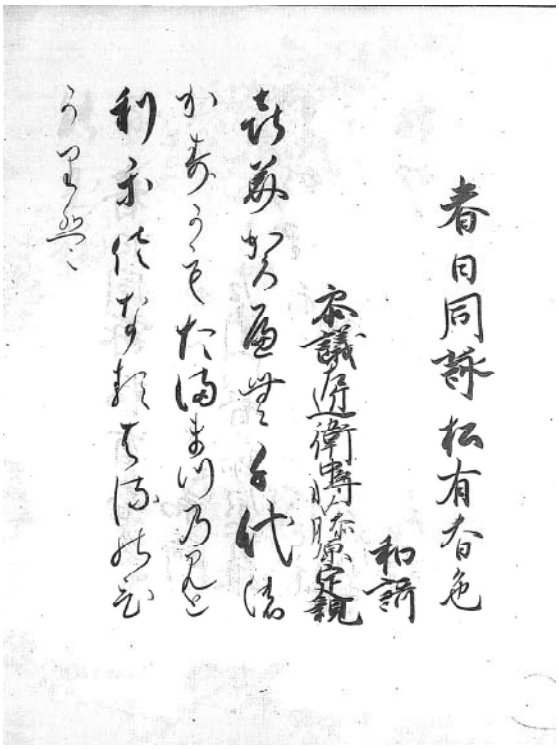


春日同詠松有春色

和謌

左衛門督藤原実雅

かきりあれは千代とも
かゝしことの葉のたま
松か枝のはるのひ
かりは

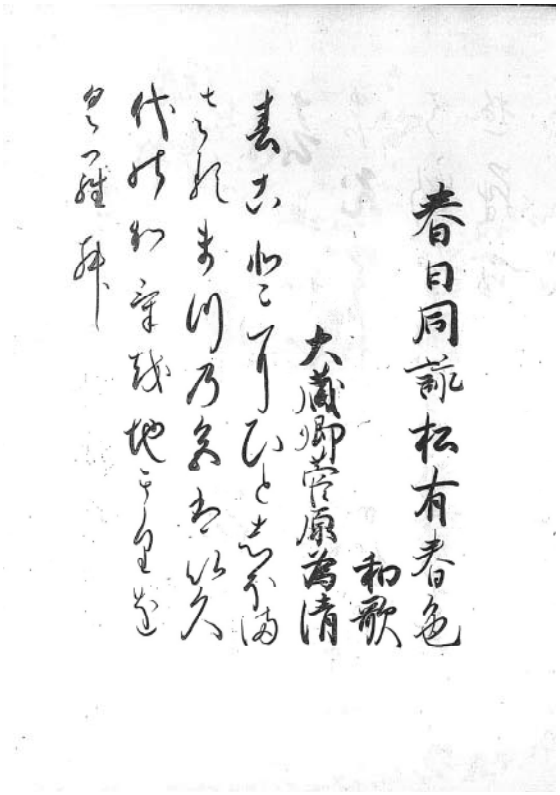


春日同詠松有春色

和謌

参議左近衛中将藤原定規

きみかへむ千代の
かすかもたまみつのみと
りかさなるはるのひ
かりは」八

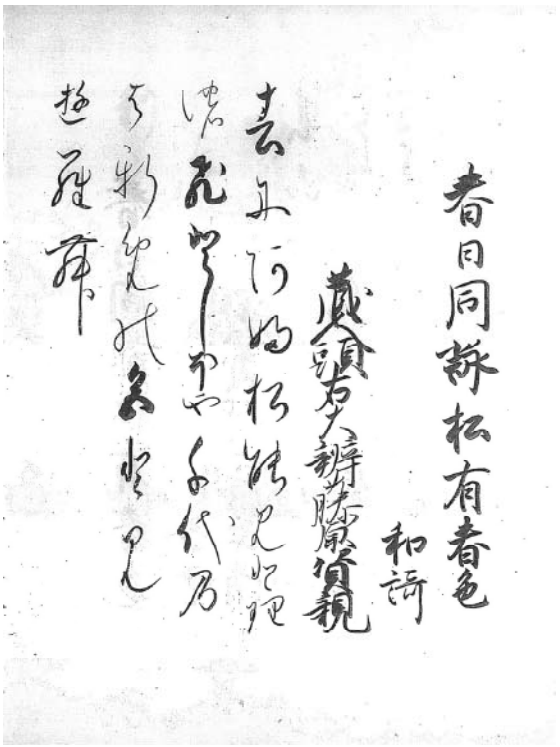


春日同詠松有春色

和歌

大蔵卿菅原為清

春ことにひとしほま
さるまつの色はいく
代のかけをちきりを
くらむ

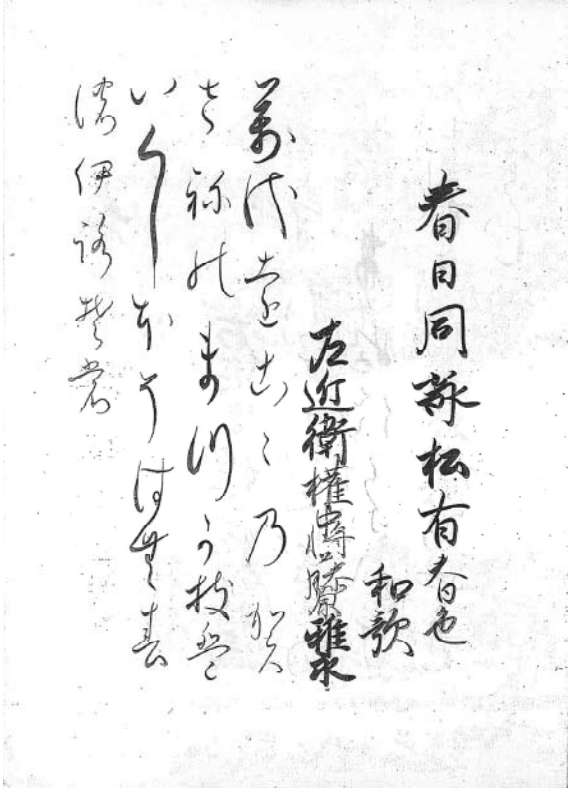


春日同詠松有春色

和謌

蔵人頭右大弁藤原資親

春にあふ松のみとり
のひとしほや千代の
はしめの色と見
ゆらむ」九

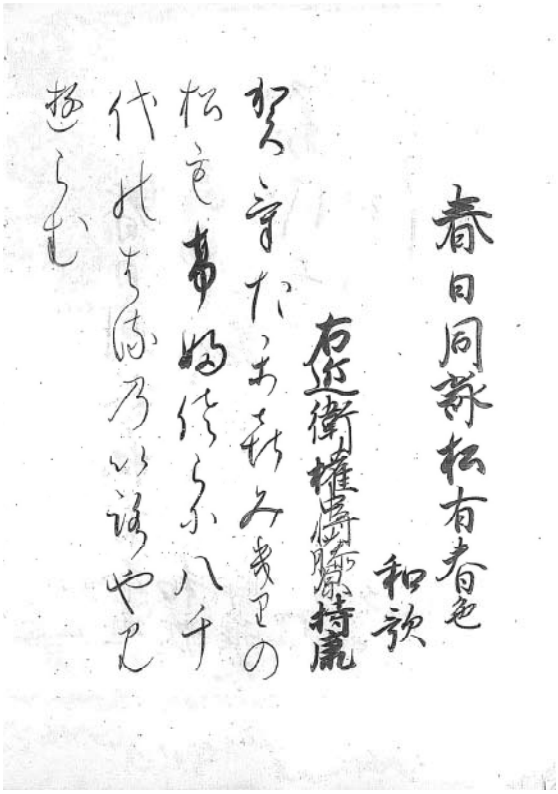


春日同詠松有春色

和歌

左近衛権中将藤原雅永

万代をこゝのか
さねのまつか枝は
いくしほそはむ春
のいろそも

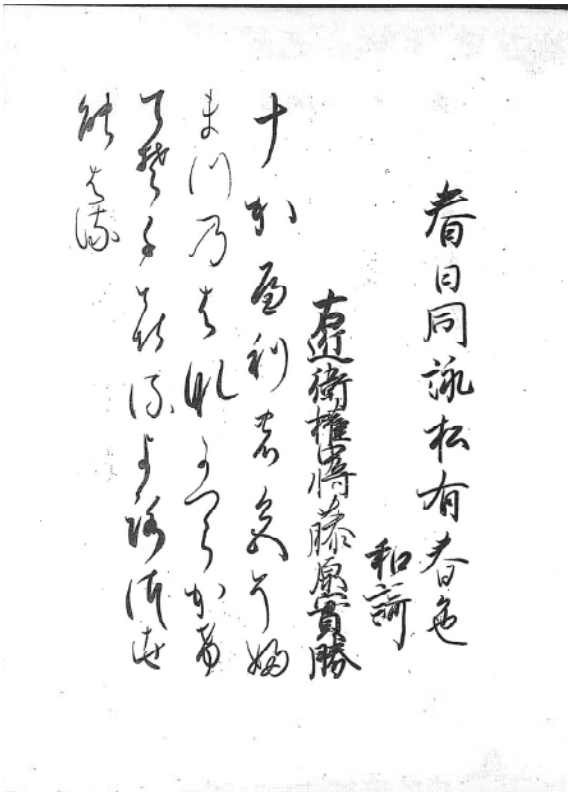


春日同詠松有春色

和歌

右近衛権中将藤原持康

かけたかきみきりの
松もけふさらに八千
代のはるのいろや見
ゆらむ」一〇

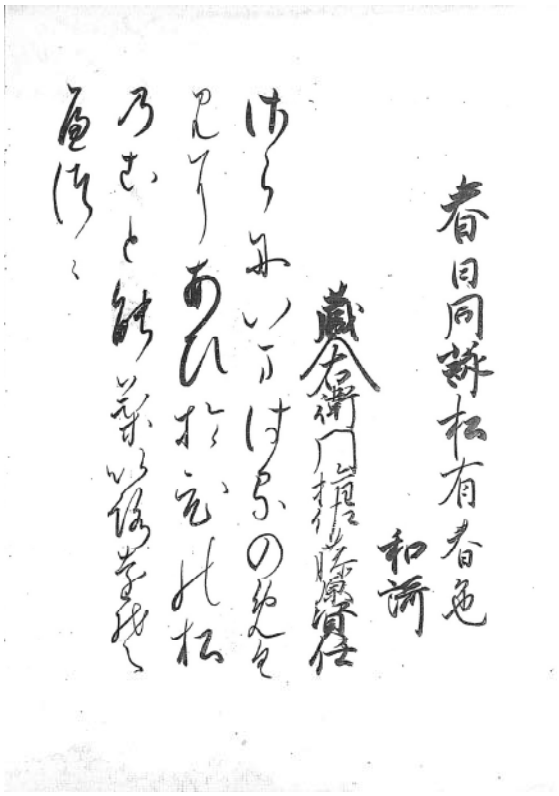


春日同詠松有春色

和謌

右近衛権中将藤原実勝

十かへりの色そふ
まつのはなかつらかけ
てそちきるよろつ世
のはる

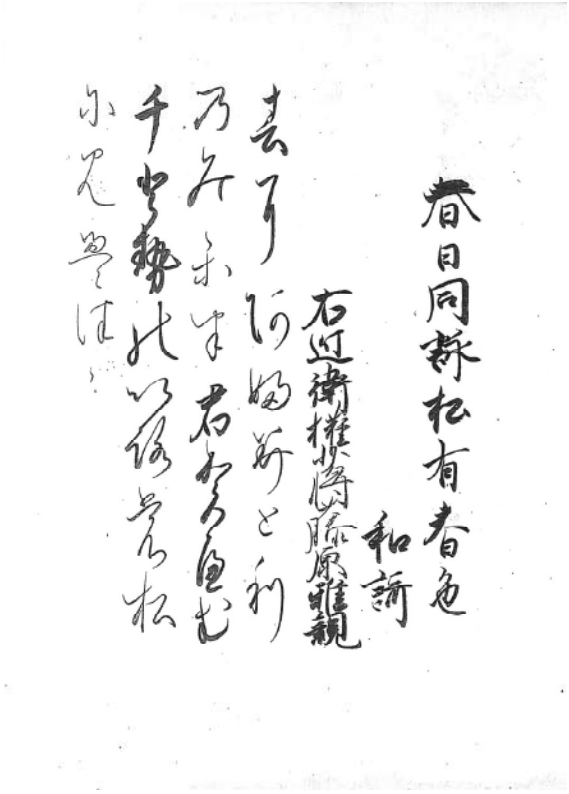


春日同詠松有春色

和謌

蔵人右衛門権佐藤原資任

さらにいまはるのめく
みにあひおひの松
のことの葉いろをそ
へつゝ」一一

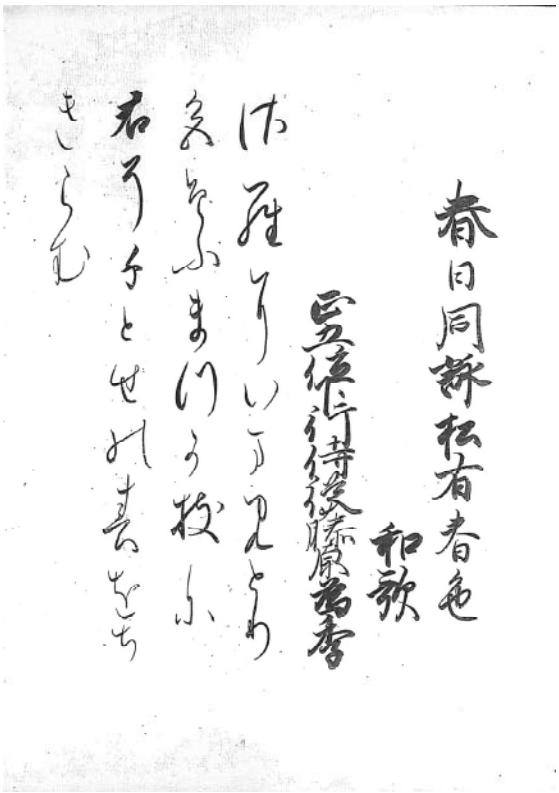


春日同詠松有春色

和謌

右近衛権少将藤原雅親

春にあふみとり
のみかは君かへむ
千とせのいろも松
に見えつゝ

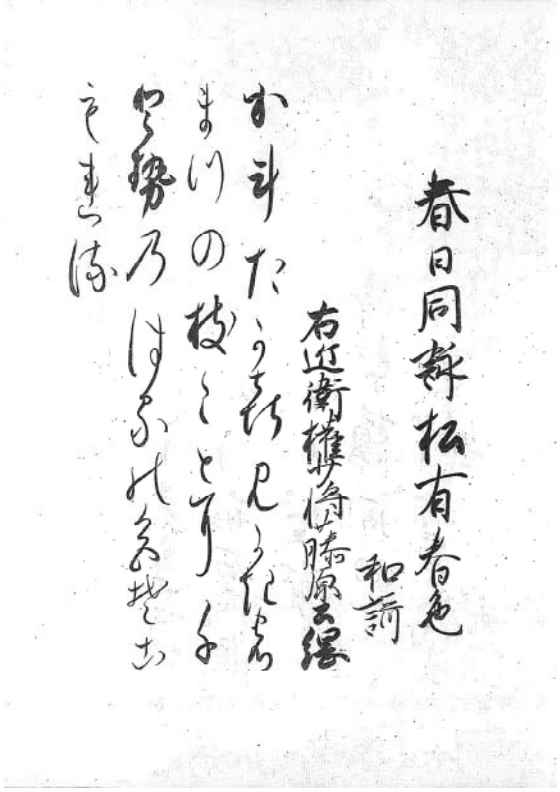


春日同詠松有春色

和歌

正五位下行侍従藤原為季

さらにいまみとり
色そふまつか枝に
君に千とせの春をち
きらむ」一二

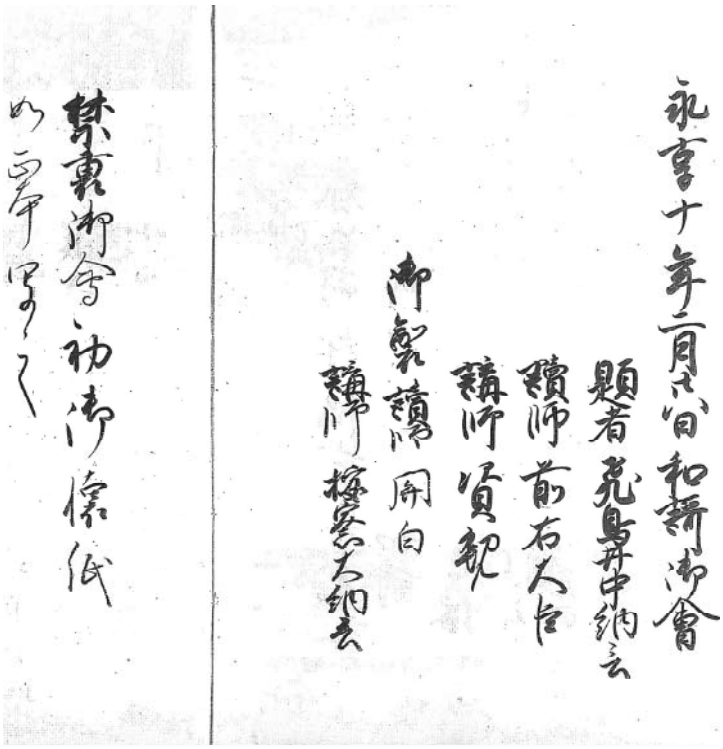


春日同詠松有春色

和謌

右近衛権少将藤原公綱

かけたかきみかきの
まつの枝ことに千
とせのはるの色そこ
もれる



永享十年二月廿八日　和謌御会

題者　飛鳥井中納言

読師　前右大臣

講師　資親

御詠　読師　関白

講師　按察大納言」一三

禁裏御会初御懐紙

如正本写之（以下空白）（片面空白）」一四

（武井和人）

2 永享十年四月十日禁裏月次当座御会（初度）

月次御哥　初度

霞知春

やかてはや大内山もかすむなり　千代のあしたの春のしるへに

竹鶯

あさな〳〵ちよのこゑある鶯の　ねくらや竹の台なるらむ　義―

梅風

のとかなるかせのすかたをさきたてゝ　はなもおりしる梅かゝそする　雅世

春暁月

はるかせもかすみも雲におさまりて　かけのとかなる在明の月　公保

尋花

はなの色になをまかへてや白雲の　にほはぬ山を今日もこゑまし　実量

盛花

さかりなる雲井のさくらいまよりの　ちとせの春を契をくらし　定継」一五

松上藤

松かえのちとせをこゆる藤波は　八百万代のいろにさくらし　実雅

郭公

うたゝねのまくらを過て郭公　ゆめにまきるゝ夜半の一声

早苗

めくみある御代をときそと賤の女か　千町のさなへとらぬ日そなき　資親

夕納涼

夏の日もはやゆふくれになりにけり　すゝしさまさる木ゝの下かけ　俊秀

七夕

たなはたのまれなるなかもかはらねは　あきをまことのちきりとやしる　定親

草花露

ちよのあき数〳〵みえて萩の戸や　をきそふつゆも色に出つゝ　教季

初雁

きにけらし秋をちきりて九重の」一六　雲井にたかきはつかりのこゑ　実雅

山月明

四方にみつきみか光もあきらけき　大内山の秋の夜の月　義―

池月

池水にしくや玉ものかすまても　くもらぬ御代とすめる月かな　雅永

擣衣

あきかせや夜をへてさむきたかさとも　はやをとたえすうつころもかな　資益

紅葉

そめてけり時しる秋のつゆしもに　木すゑのこらぬ木ゝの紅葉ゝ　実勝

時雨雲

幾度かやまめくりして過ぬらん　しくれにつるゝ峯のうき雲　公保

冬月

さえとほる雪けの雲のころもより　袖までこほる夜半の月影　雅世

海辺雪」一七

うらかせにとまひきかけて帰るさや　雪になるをのあまのつりふね　定親

忍恋

いかにせんたえぬ涙のたまゆらも　心ゆるさぬ袖のしつくを　雅永

祈恋

みしめなはむすふ契もなかゝれと　ゆくすゑかけてなをいのるかな　資任

契待恋

たのみつるわかまことゆへいつはりの　ある世をしらぬゆふくれの空　雅世

初逢恋

としをへてあふさか山のさねかつら　くるしやこよひ鳥の初音も　定継

別恋

まちわひてしほりしまゝの涙をも　ほしたにあへぬきぬ／＼のそて　実量

顕恋

つゝみこしかひこそなけれうきなのみ　はやあらはるゝ袖のなみたに　永豊」一八

恨恋

いつよりか人のつらさはますかゝみ　身を秋風のたえぬうらみに　持康

松久友

としをへて猶光そふ玉松の　みとりかはらぬ友とこそみれ

眺望

のとかなるうらはの波もはる／＼と　まほにかけたる沖の釣舟　隆夏

祝言

今日よりそ猶さかゆかん末とをき　きみかこと葉の玉ほこの道　義―

（四行分空白）

永享十年四月十日

禁裏当座御会室町殿御頭

（一行空白）」一九

（石澤一志）

3 永享十年四月十六日内裏月次当座御会（月次御哥第二度）

月次御哥第二度

更衣惜春

かへて猶したふたもとの花の色も　おもかけうすき夏衣かな

尋余花

たちかへり花やたつねむよしのやま　はるよりのちも春のしほりに　公保

籬卯花

しけりゆくまかきのくさもうつもれぬ　さくうのはなの雪の光に　実量

山葵

あふひくさかけてや今日は神山も　ちかきまもりのかさしなる覧　定親

待郭公

つれなさの心くらへかほとゝきす　まつも卯月の有明の空　定継

月前郭公

わすれめや雲井の月のいさよひに　あかすきゝつる山郭公　雅世」二〇

郭公頻

夜もすからあかぬこゝろにまかせてや　声もたゆまぬ山ほとゝきす　資親

端午興

もろ人の袖のあやめのなかきねを　ひくやちよへんためしなるへき　重有

早苗

ゆたかにてひろきたのもにさなへとる　しつかこゝろも隙なかるらし　隆夏

夏草

なつくさのしけきことはの花もこそ　めくみのつゆの数も見えけれ　永豊

河五月雨

日をへつゝにこれる水のいつみ河　かはをとたかし五月雨の比

鵜河

あけぬるかうふねのさほのさして猶　いそくとみゆるかゝり火の影　持康

蛍知夜

かたいとをよるのほたるやなれもいま」二一　あはぬおもひにもえ渡覧　雅永

夕立過
すきにけり山かせはやみゆく雲の　まそてすゝしきゆふたちの雨　実雅
杜蝉
ゆふくれは梢にしけくなくせみの　こゑふきをくるもりの下かせ　実勝
寄風恋
我方になひきもやらぬみたれ芦の　いかなるえにかかせかよふらん　公保
寄雨恋
しのふとて月にはとはぬなか〳〵に　たのむとをしれむらさめの空　定親
寄山恋
ふみわけて誰にかさてもいはこ菅　つらきみむろの山の下道　雅世
寄橋恋
あふせにはかけつる夢もかひなしや　たゝかりそめのうたゝねのはし　実量
寄下草恋」二二
しられしな忍ふのもりの下草に　なみたのつゆのみたれわふとも
寄鳥恋
あふことはいなおほせとりもかひそなき　我にをしへぬなかのちきりに　雅世
寄虫恋
はかなしやうつるこゝろの花そのに　たのむこてふのゆめのちきりは　雅永
寄衣恋
あふよさへなかにあかしとかこちけむ　わかゝたしきのころもへにけり　実雅
寄遊女恋
なみのうへふねのよるへの一夜つま　さのみこゝろをつくさすもかな　重有
寄海人恋
いかゝせんあまのうきふねうきしつみ　おもふこゝろのすゑのしらなみ　教季
関鶏
とさしせてあくるをしらぬせきもりは　八こゑのとりやおとろかすらむ　宗継」二三
里竹
くれ竹のすゑに吹しくゆふかせに　なを遠方のさとやみゆらん　資任
田家
かりあけしいなはのゝちのいほりこそ　そのまゝしつかすまゐなりけり　資益
旅行友
たひころも日もゆふくれにあふさかや　ゆきゝのともゝなを隙そなき　俊秀
寄世祝言
敷嶋やさかゆく道のやちまたに　おさまれるよのほとそしらるゝ　雅世
（二行分空白）
永享十年四月十六日　当座　飛鳥井中納言頭
（以下空白）」二四

（石澤一志）

4 永享十年四月二十八日内裏月次当座御会（月次御哥第三度）

月次御哥　第三度
朝軒樹
ふきすくるあさけのかせにつゆちりて　しけるさくらの梢すゝしも
卯花
あけはまたそれとそわかむ月かけに　いろにまかへてさける卯の花　持康
初郭公
わすれてやもらしそむらん郭公　つゝむよさらしをのか初音を　実量
郭公数声

ほとゝきすなくねもいまはしけをかや　まつはつらしとなにかこちけむ　宗継

郭公幽

いたつらにすきぬはかりそほとゝきす　きゝつといはむほとはなけれと　雅永

菖蒲

あやめくさけふより袖にちよかけて　なかきねをさへひきやそへまし　隆夏」二五

夕早苗

つくはねのすそわのさなへとり〳〵に　くれぬといそく田子の諸声

橘

むかしにもこえてみはしのたち花や　けにたくひなきにほひなるらん　実量

滝五月雨

水のあやも猶おりはへて五月雨の　くもそみたるゝ滝のしら糸　公保

蚊遣火

蚊やりたく我居はいかにうすけふり　なひくやとさへいゝそねられね　実雅

夏月

月影もさしてあきとやいそくらむ　めくるそはやき夏の夜のそら　雅親

水鶏

せきのとはさゝてとしふる御代にあひて　水の鶏なにたゝくらん　為清

照射

五月やみくらき夜ことにとほす火の」二六　きゆるやしかの命なるらし　重有

鵜河

影もみぬ月のかつらの川なみに　うつりて行や瀬ゝのかゝり火　資親

泉

濁なきいつみの水にちるたまの　みきわすゝしき松の下風　定親

蛍

光そふ池の玉藻のかす〳〵に　なをあらはれて飛蛍かな　実勝

晩立

月にこそいとひし雲も夏の日の　かけにまたるゝゆふたちのそら　雅世

名所夏祓

みそきするかもの河浪たちかへり　また秋ちかき風のすゝしさ　資任

初恋

いつのまにそてのなみたのはつしくれ　ふかきおもひのいろにそむ覧　永豊

忍久恋」二七

年月を我そふるやの軒のくさ　かれぬおもひも人しれぬ世に　実雅

連夜待恋

我もまたつれなき名にやたえなまし　さのみまつよのかすをかさねは　公保

逢恋

つらしともうしともしらしにゐまくら　かこたぬなかにおつるなみたは　宗継

惜別恋

いかにせん八声のとりのなく〳〵も　ひきとめかたききぬ〳〵の袖

通書恋

これをみようきかすはかりかきつめて　たえるそてゆく水くきの跡　雅世

恨

つれもなき人のこゝろを何ゆへか　うらみはてゝも猶したふらん　資益

岡松

ちとせへむきみか光もいつる日も　さすやおかへの松にみゆらし　俊秀」二八

田家

しつかすむたのもにつゝくかよひちの　すゑまてほそくたつけふりかな　定親

羈中衣

たひころも野原の露をわけくれぬ　くさのまくらになをやしほれん　教季

海辺煙

もしほやくけふりのすゑもひとかたに　なひくまつほのうらかせそ吹　雅永

神祇

いやましになをよをまもる神もかみ　きみもよみなるときそしらるゝ　雅世

（二行分空白）

永享十年四月廿八日三条　当座
別当頭

（四行分空白）」二九

（日高愛子）

5 永享十年五月十日内裏月次当座御会

夏朝

夏山のしけみをわけていつる日の　にほへるかけそ空にすゝしき

夏雲

かきくるゝそらそとみれはほともなく　くれゆくみねの夕立の雲　教季

夏風

ゆふたちの雲はよそなるやま風も　たちくるそてにまつそすゝしき　定親

夏雨

さみたれの雲のころもゝいくへには　たちかさぬらんきちの遠山　宗継

夏露

夏草の露さへしけくなるまゝに　すゝしさまさるのへのゆふかせ　俊秀

夏夕

道野辺のなみ木の柳はる〳〵と　ゆふかせつゝくかけそすゝしき　重有

夏夜

わすれては月かとそおもふ五月やみ」三〇　あけかたしらむみしか夜のそら　雅世

夏山

しけりあふ木すゑのいろもかさなりて　大中山のまつそこたかき　資任

夏野

それとしもなつのゝくさのしけみより　さきてしらるゝなてしこの花　公保

夏滝

はれやらぬ日数をふるの滝つせや　よそまてひゝくさみたれの比

夏海

紀の海やゆらのみなとにゆくふねの　あとよりあくるみしかよの空　重有

夏河

なつみかは夏とはいかゝしらなみの　をともすゝしき山陰にして　実量

夏池

五月雨の日数にそへて池のおもゝ　なをひろさはの名にや立らむ　雅永

夏江」三一

大井河いり江のまつにふくかせも　なつなき波のをとそすゝしき　雅世

夏田

あきもはやこゝにやかよふつくはねの　すそわの田井のかせそ涼しき　隆夏

夏草

むすひつるのもせの草のいつのまに　わけみぬはかりしけりそふらむ　持康

夏竹

置露もちよのかすみるたましきの　庭にすゝしくなひくゝれ竹　為清

夏篠

すゝしさも月にそみゆるかけやとす　いさゝ小篠のみしかよのころ　資親

夏松

ふかみとりいつともわかぬかけみえて　なつはよそなる松の下水　宗継

夏杉

ゆふたちの杉の下道つゆをちて　こゆるもすゝし逢坂の山　永豊」三二

夏柏

をのつから風ふかぬよもすゝしきや　照日をそふるならの下かけ　雅親

夏虫

むらさめのしのたのもりのゆふつゆも　千枝にをちそふ蝉の諸声

夏鳥

きゝてこそこゝろもはるれむらさめの　雲のはやまの山ほとゝきす　実量

夏獣

ともしするあとに草葉のつゆけきや　ねにたてぬ鹿の涙なるらん　公保

夏衣

木のしたにたちよるそてのすゝしきや　日かけもうすきせみの羽衣　実勝

夏舟

大井河さゝのうふねのかゝり火は　なかれをつたふ蛍とそみる　資益

夏鐘

なつの夜のまさこの月に霜さへて」三三　おのへのかねのこゑそ明行　雅世

夏恋

しるらめやよはのほたるのかけならて　ねにたてぬ身のおもひありとも　定親

夏旅

よしさらはあけやすきよになくさめむ　ふしうきのへのかりねなりとも　雅永

夏祝

きみかよをいのるこゝろももろ人の　おなし河瀬にみそきすらしも　雅親

（三行分空白）

永享十年五月十日　当座　資任頭役

（以下空白）」三四

（日高愛子）

6 永享十年五月十九日内裏月次当座御会

卯花似月

夕月夜それかと見えてさきつゝく　うの花かけはいまさかりかも

葵懸簾

雲のうへの日かけにむかふ玉たれの　こすのあふひにみとりそふなり　定親

尋時鳥

このさとはとはぬはつねを待わひて　先わけくらす山郭公　資任

独聞郭公

待わひしこゝろはしるやほとゝきす　ひとりねさめのそらになくなり　資親

郭公頻

さみたれに木ゝの雫もきのふけふ　ともにひまなき山ほとゝきす　隆夏

袖上菖蒲

あやめくさまくらにむすひけさは又　そてにかけてもあかぬにほひそ　定継

橘薫風

涼しさは袖をすきてもたちはなの」三五　にほひそのこる軒の夕風　雅世

蚊遣火

けふりをはへたてもやらすあしかきの　まちかきやとにくゆるかやり火　雅親

山五月雨

ほしやらてころもへにけり乙女子の　そてふる山のさみたれの空　実雅

夏草滋

ことの葉のたねこそみえてしら露の　玉しく庭にしける夏草　公保

浦夏月

ぬれてほす海人の衣のうらなみに　みるめすくなきみしか夜の月　雅世

江辺蛍

をくつゆの玉江のあしのうらかせに　みたれもはてすとふほたるかな

疎屋夕顔

このころはあるともよしやをのつから　花にてかこふゆふかほのやと　重有

閨中扇」三六

をのつからすゝしき風やかよはまし　秋をとなりのねやのあふきは　実量

夕立早過

はやせかは北まさるみかさもとりあへす　はれゆく波の夕立のあと　雅世

樹陰納涼

かたへふくゆふかせすゝしさくらあさの　おふのうらなしかけしけりつゝ　為清

暮山蟬

なくせみのはにをくつゆも数そひて　ゆふかけすゝし山の下道　雅永

六月祓

みそきするそてにや秋のかよふらむ　たちくる波にかせのすゝしき　持康

契経年恋

むすひをきし契の末は人もなを　わするゝはかりとしそへにける　俊秀

連夜待恋

しらせはやちきりをはてしかひもなく　よひ〳〵ことのこゝろつくしを　教秀」三七

初逢恋

年月をしのふのみたれこよひこそ　かきりありけるちきりとはしれ　雅永

深夜帰恋

わかれちをなにいそくらむ鳥の声　かねよりのちも猶のこる夜に　資益

隔河恋

いつまてかよそにへたつるなかゝはの　あふせもしらす恋渡らまし

被厭恋

なそもかくいとふにはゆるならひにて　身をわすれても猶したふ覧　重有

互恨恋

これもけにこゝろくらへのつらさとは　人のわか身をかこつにそしる　公保

山館竹

やまふかきさとのしるへとみえてけり　けふりもなかく竹の一むら　実勝

海辺松

あまのたくしほ木にもなくいそなれや」三八　いそやまゝつのふかきみとりは　実継

杣川筏

やまかせもはやせさしおろすいかたしの　さほとりあへぬみおの杣河　実雅

風破旅夢

ふるさとにかよひもはてすかりまくら　あらしやゆめのせきとなるらん　実量

社頭榊

春日山みねのさか木葉とりわけて　きみにつかふる道いのるかな　定観

永享十年五月十九日　当座　資益頭也
禁裏御会

（酒井茂幸）

【略解題】

小論で底本とした宮内庁書陵部図書寮文庫蔵『禁裏御会和歌』（五〇一―二九〇）の書誌は、以下の通りである。

［装訂］列帖装。［法量］縦二三・七×横一七・五cm。［表紙］本文共紙。［外題］禁裏御会和歌永享十年（原・左・簽・書）［楮素紙短冊、一六・四×三・五cm］。［内題］ナシ［本文］1＝一面六～七行、2～6＝九～一〇行、和歌一首二行書。［字高］1＝約一六・〇～一八・五糎、2～6＝約二〇・〇糎。［紙数］尾部に遊紙が五丁置かれ、墨付三九丁。内訳は、三括よりなり、第一括＝八紙一五丁、第二括＝八紙一六丁、第三括＝六紙一一丁＋二丁。第三括は、括りの前部分に、二丁分を貼り付ける。丁数に余裕があるにも関はらず、このやうな措置を取つた理由は不明。［本文料紙］斐紙（生成色）。［識語］一三ウ・一四オ、一九オ、二四ウ、二九ウ、三四ウ、三九ウに存する。釈文参照。［蔵書印］墨付第一丁表右上に「宮内省／圖書印」（方朱印、単郭、陽刻）一顆あり。［書写者、書写年代］江戸前期写。［備考］後半一面一首二行書作者名が下句末に記されるところから、後半の一一丁は短冊写であらう。

○

室町前期、禁裏における月次歌会の資料は、永享十年からのものが間歇的に伝存してゐる。即ち、井上宗雄『中世歌壇史の研究　室町前期』において、以下のやうな概括を見る。

室町後期以降、宮中月次歌会は廿五日に行われているが、室町前期においては未だ年によつて日は違う如くである。しかし月次会の詠作が多く残されてくるのは永享十年頃からである。即ち「禁裏御会和歌」（書陵部蔵五〇二―二九〇）はこの年二月廿八日御会始、四月十日・同十六日・同廿八日、五月十日・同十九日の月次歌を収める。二月御会始は薩戒記（公宴部類記所収）・看聞御記にも記事がみえている。他はいずれも卅首歌で、雅世・公保・実量・定親・宗継・重有・雅永・実雅・資任・雅親等々の廷臣が参仕、詠歌している。為之・持和は勿論みえない。（前掲書・一一八頁）

各々の歌会に関しては、『看聞日記』『薩戒記』『管見記（公名公記）』等の記事により、その概要を知りうる。大半は既に『後花園天皇実録』に引かれてゐるところであるが、近時刊行された活字本を多く採用し、また、著者自筆本より引用をなし得た等、若干の前進が出来たのではないかと思ふ。重複をあへて厭はなかつた所以である。

1 永享十年二月二十八日内裏和歌御会

◆廿八日、晴、（略）抑内裏御歌御会初也、秉燭之間室町殿御参内、関白（二条持基）・前摂政（一条兼良）・右大臣（近衛房嗣）・前右大臣（三条公冬）・太炊御門前内大臣（大）（信宗）・内大臣（鷹司房平）・按察（三条西公保）・右大将（寺公名）・三条大納言（実量）・殿大納言（二条持通）・飛鳥井中納言（雅世）・中御門中納言（松木宗継）・別当（三条正親町三条実雅）・中山宰相中将（定親）・五条三位、殿上人（飛鳥井）雅永朝臣・（木造）持康朝臣・（日野）資親朝臣・（滋野井）実勝朝臣・（烏丸）資任・（飛鳥井）雅親・（八条）為季・（正親町三条）公綱等参、先一献、三献了、御会事了、室町殿御前御参、不及一献軈御退出、平鞆御剣被進、公卿御剣面々進之、執柄・殿上人／少々不進歟、及深更御会無為珍重之由内裏献賀書、進御剣、重賢為御使、有勅報、

○

卅日、晴、（略）禁裏御会初珍重之由公方被申、進御剣如例、

（『看聞日記』〔図書寮叢刊本による。以下同様〕）

◆十五日、己巳、天陰（陰、ソ作晴）、己刻［許シヨ］雨降、未斜属晴、早旦参室町殿、飛鳥井中納言・別当等参入、頭右大弁資親朝臣参入、畏申和哥御会始奉行事云ゝ、内裏和哥御会始日次廿八日・奉行職事資親朝臣□（明シソ）徳度頭弁資国朝臣例也、・題者飛鳥井中納言、・参仕人数等事、今日飛鳥井中納言内ゝ申定、相府（日野西）参内裏、付女房申入之、自内裏被仰於頭弁資親朝臣云ゝ、題事又内ゝ兼申定、□（相府ソ）今日付頭弁奏聞云ゝ、後聞、頭弁書和哥題於紙屋紙一枚、持参室町殿進入之云ゝ

（『薩戒記』〔大日本古記録本による。以下同。底本は、史料編纂所蔵日野西本（前半）、後半は陽明文庫蔵薩戒記抄息抄出。校合本、東山御文庫本＝ヒ、陽明文庫蔵七十二冊本＝ヨ、京都大学附属図書館蔵滋野井本＝シ、尊経閣文庫蔵歌会記＝ソ。なほ表記は一部改めた箇所がある〕）

○

十六日、庚午、天晴、早旦参室町殿、飛鳥井中納言雅世、参入、者（者、ソ作共）入見参、相府令尋予□（給ソ）云、明徳度和哥御会、右府誰人哉者、申久世相国具通（久我）云（公ヒヨシソ）、被仰云、彼度為尹（冷泉）・為右（二条）・雅縁（飛鳥井）等参仕、然而彼相国献題何□（ソ様）子細哉、若今度以摸彼例、如右府（近衛房嗣）卿被奉之歟、無［左右］（ソ）可為飛鳥井中納言之由計申之如何者、予申云、為尹・為右等為浅位身、又于時彼相国有道之誉故歟、凡不知子細事也者、又被仰云、応永廿六年度（三月十六日）誰人献哉、申云、為之朝臣也、但於題者後小松院令相計給歟之由、其時所［題］（ソ）承及也□（者ソ）頭弁資親朝臣送消息云

松有春色

右和哥題、来廿八日内ゝ可被披講、凝風情、可令予参給者、仍（依ヨシソ）

天気執違如件、

二月十五日　　右大弁資親

謹上　中山宰相（定親）中将殿

松有春色

右和哥題、来廿八日内ゝ可被披講、可令参仕之状、謹所請如件、

二月十五日　　参議定〻

（同前）

○

廿八日、壬午、天陰、微雨時ゝ、早旦参室町殿、条ゝ承旨命、参関白・前摂政等申合、是今夜御進退不審事也、未剋帰参、申両殿（持基・兼良）下返報、及黄昏予着直衣浅黄綾指貫、着下袴、参　内、先是人ゝ参集、秉燭之後、右相府令渡御直廬大納言典侍局、給、則着直衣下結、令参恒御所、先御盃三献、其後直自御湯殿上南面、令退出殿上ゝ戸辺給、予付女房申可有出御之由、可有出御之時分、予（付カ）着奉行職事可申事由之旨、有兼仰、則出御、自北方東間簾中関白可令候御簾歟之由、予申気色、令答不可有其儀之旨給、如何、着御ゝ座、南面、次公卿、関白・前摂政已上奥座、依左相府可令着端座給、共令着奥給、其路自南簀子入妻戸間着之、・左相府端座、西弘縁布障子、令着北第三間給、・前（三条公冬）右府奥、・右府端、南一間壁、仍入自南面妻戸着之、・大炊御門前内府（信宗）奥、

右府未被着座以前、入妻戸被進寄、予示之令退入了、・内府（鷹司房平）端、如右府、・按察大納言公保、南方横敷、其後巻御簾而入妻戸、如着奥座之人参進、若猶彼座之人可着之歟、・左大将公名（西園寺）、端座也、此人独着衣冠、自余公卿皆直衣也、・三条大納言実量、着横敷座、経簀子自座後着之、等着座、自余公卿殿大納言持通・飛鳥井中納言雅世・中御門中納言宗継・別当実雅・予・大蔵卿、為清、依無座不着之、次右衛門佐永国（高倉）持參切灯台加下敷、凡禁中儀、或用紙屋紙於打敷云ゝ、例歟、今日儀頗不審、頭弁申沙汰歟、可尋事也、立御座前、御左方、移居高灯台火、取高灯台退入、侍従為季（八条）持参文台、御硯筥蓋也、置御前畳外、以裏方為上置之、退入、蔵人将監源為治（薄）持参読師円座、敷御硯蓋乾方、蔵人将監橘以益持参講師円座、敷御硯蓋南方、以上入南面妻戸参進之、次頭弁資親朝臣奉行也、取集殿上人資親朝臣・左中将雅永（飛鳥井）朝臣・右中将持康朝臣（岡野井）・実勝朝臣・蔵人左少弁資任・右少将雅親・侍従為季・右少将公綱（三条）、懐紙参進、置文台上以下方為御前、退下、次公卿自下薦置懐紙、先不着座之公卿於便宜所披見懐紙、持之入南面妻戸、置之退下、次在座公卿自下薦次第起座置之、於座披見之、於文台下不及披見置之、膝行・逆退等之儀如常、大略其作法一同也、左相府殿令置懐紙給之時、人ゝ致家礼、抑左相府殿令着端座給、令置懐紙給之時、経簀子入座末妻戸、可令参進給歟之由有沙汰、然而猶自座前直可被（令ヵ）参進給之由、両殿下被計申、仍不及令下簀子給也、両様共雖有其例、今日儀猶為略儀、然而猶此御座席尤有便也、関白令置懐紙給後、依　天気、前右府移着読師円座、伺［天気召講師、資親朝臣、二音召之、資親朝臣参進着円座、次又依］（ヵ）天気召講頌人、按察大納言・飛鳥井中納言・中御門中納言・別当・大蔵卿・雅永朝臣・雅親等也、予可為人数之由兼蒙仰、然而依可勤下読師、不参進所役了、可追加也、各参進、已上読伺天気召人ゝ儀、只其由許也、但於講師名者高召之、群居読師後、読師召寄（底本「寄」相ミセケチ）予、其由也、予経西広庇参候読師後長押下、読師取集懐紙等被授之、暫無可被授気色、仍予聊示其由了、予頗昇居長押上、相当読師後、此所有狭居、仍甚候悪、衣（尤ヵ）可令撤之也、予兼不見此事、仍不及入魂也、取懐紙置前、先突懋（整）之、以長短可知卿相・雲客分別云ゝ、然而数通之中不能取分之、仍只一ゝ披見了、但其中以短知殿上人懐紙、先披見之了、先雲客下薦懐紙四五通被重之、了後凡未重調之以前、只一枚ゝゝ可献之云ゝ、然者其次目可遅ゝ故、予以今案先四五通重之後、一枚ゝゝ奉之了、取最末人公綱懐紙、自袖下奉読師、ゝゝ取之被披置文台上、以文下方為御前、講師読之、講頌一反、到参議一反也、到予懐紙各一枚献之、予歌披講之間、悉重懋（整）二倍押折之、以端作方為上、如此押折時、下薦懐紙為上、次第可被引取之也、自読師右袖下指出前方、以文下為読師方、頗被引寄之後、予居下長押下、更起退入、ゝ南面妻戸参加講頌座、大・中納言二反、中御門中納言歌一反講之了、人ゝ失念云ゝ、発音人誤歟、予未加此座之以前也、執柄・大臣三反反数先例不定、今度大臣可為五反歟之由、有沙汰之処、頗可経程、猶可為三反之由、内ゝ有仰定子細云ゝ、也、講師読関白歌之後、則退下、披講了講頌人頗退居、不及復座、只聊退居、猶是被召留候由也、読師取下懐紙等於文台下、西方也、押折二被置之歟、起座復本座、次関白起座、被進着読師円座、次按察大納言非当（歌）（底本「当」ミセケチ）道家、又非儒者、勤仕御製講師、其例近代希事也、然而依明応例不可為題者、同人又可為大納言内由、相府被計申上者、不及子細事也、進着講師円座、依読師召可参進歟、頗早速、如何、読師申賜御製被披置文台上、講師読之、松春ノ色有ト云ル事ヲ詠（ヨマ）セ玉ヘル和ト歌、読畢復本座、不帰、加講頌座歟、講頌七反了各退入、関白巻御製被復座、次入

御、諸卿動座、奥入下薦（座）（底本「薦」ミセケチ）前、端人下簀子、各復座自下
薦次第起座、於三条大納言者動座後不帰座直退入、如何、可尋、左相府殿則
令参御前給、被進御劔、別当持参御湯殿上南遣戸口奉之、相府取之令持参御
前給也、被申進御事由歟、御退出之時分、持参御事由被触仰予、と示左大将令請
取之了、則御退出、於御直廬改御装束、自北門内と令退出給、此後
按察・飛鳥井中納言・中御門中納言・別当・予・資親朝臣・雅永朝
臣・資任・公綱等参常御所、於御前賜御盃、各祝着退出、于時亥初
刻也、
（底本は、国立歴史民俗博物館蔵高松宮伝来禁裏本『和歌部類記』）

◆廿八日、晴、今日　禁裏和哥御会始、当御代始也、御人名（御製読師）（一条持基）関白・前摂
政・左大将殿（足利義教）・前右大臣（講師）（近衛房嗣）・右大臣（実量）・大炊御門前内大臣（信宗）・内大臣（鷹司房平）・按（御製
察大納言（講師）・左大将（西園寺公名）・三条大納言（実量）・殿大納言（三条持通）・飛鳥井中納言・中御門
中納言（下講師）・別当・中山宰相中将（五条為清）・大蔵卿（奉行講師）・資親朝臣（日野）・雅永朝臣（飛鳥井）・持康（木造）
朝臣（飛鳥井）・実勝朝臣（滋野井）・資任（法性寺）・雅親（正親町三条）・為季（高倉）・公綱等也、所役為季・永国（定）其
外六位両人云と、題松有春色、題者飛鳥井中納言、於議杖所有之云と、
（『師郷記』〔史料纂集本による。以下同。底本は国立国会図書館蔵
師郷自筆本〕）

2 永享十年四月十日禁裏月次当座御会

◆七日、晴、（略）菊第以使者申、禁裏来十日御歌人数被加云々、可
参之由飛鳥井（雅世）夜前申、和歌未無方角之間、其子細三条へ令申、公方
仰不能故障之由被切諫云々、可有頭云々、旁計会之由申、返事難及
指南事也、殊当座出題弥大事歟、飛鳥井ニ能々可被談合之由令申、
（『看聞日記』〔以下同〕）

○

十日、晴、禁裏月次御歌室町殿申御沙汰、参内先一献之間、出題探
之、次御鞠会、次披講、一献数献云々、夜事了退出（室町殿）、一献万疋被進、
順頭役也、春中之分今月たゝみ入て可御沙汰云々、御人数、
室町殿・按察使大納言・三条大納言（実量）・飛鳥井中納言・中御門（松木宗継）中
納言・別当・中山宰相中将（正親町三条実雅）・四条宰相（隆夏）・日野宰相（資親）・雅永朝（飛鳥井）臣・
資親朝臣（坊城）・持康朝臣（木造）・永豊朝臣（滋野井）・実勝朝臣（烏丸）・資任（白川）・資益（今出川）・教季
・俊秀、
事了、源中納言為御使内裏目出（後花園天皇）之由申入、御劔進之、其後御乳人御
短冊持参、忿拝見、明旦早々可返進之由被仰下、三十首也、当座御
歌殊勝也、初参人々四条宰相・永豊朝臣・資益・教季・俊秀也、菊
第未練初心也、雖然被加御人数初参、珍重也、「為清卿（頭書）・雅親（正親町三条）・公
綱、雖御人数不参、為清卿・雅親ハ服暇之間、賀茂祭御神事不参、
公綱ハ違例云々、」

◆十日、晴、伝聞（ママ）、禁裏被始和哥、御月次、毎月可為今日云々、武
家被参（ママ）内云々、人数按察使大納言以下十八人之由所聞改也、
（『管見記（公名公記）』〔宮内庁書陵部図書寮文庫蔵西園寺公名自
筆本〔F一一一一〕による。以下同。本日条のみ史料稿本を参看す〕）

◆永享十年四月十日、〔甲子〕（ヅ）
〔天晴〕（ヅ）早旦参室町殿（足利義教）、飛鳥井中納言（雅世）・別当（正親町三条実雅）・蔵人左少弁資（烏丸）
任（後花園天皇）等参入、依入院令渡通厳（玄）寺給、今日和歌御会御参事、自内頻被仰、
猶令辞申給、飛鳥井中納言為御使参内畢、重以勅書被申之、仍可令
参給之由令申給云と、巳剋着直衣参　内、堂上・堂下掃除事加下知、
又泉殿御座席等致沙汰了、悉沙汰（整カ）懇了後、暫退出、於少納言益長（東坊城）朝

臣宿所、着改宜直衣帰参、未終剋左相府殿(義教)令入御直廬、大納言(広橋綱子)典侍局、参入輩参向門外蹲居、則令着御直衣給了、先令参泉殿給、先是主上(後花園天皇)渡御、則有御盃、女房陪膳也、三献許後、飛鳥井中納言雅世、依召参上、被下御前御硯、被仰可出題之由、於簀子敷書之、不取出御硯、乍［在］(ゟ)筥中書之、被下御前御硯之時、自筥取出之書之、故実也、四季・恋・雑卅首也、悉書之、了折重之盛御硯蓋、持参御前、主上令取御、了持参相府御前、令取給之後伺御気色、召人ゝ賜也、次第参進、賜一首退入、此次至雅永朝臣(飛鳥井)賜巡盃、相府御酌也、詠進歌数之輩進、又賜題、了相府令退御前給、主上渡御御黒戸御所、自此所可［令］(ゟ)(三)降立御鞠給之故也、東面垂御簾、御後方立屏風、此後令撤南方渡御切馬道開土戸、令番匠等撤之［了、］(ゟ)(三)賀茂輩自此戸可参進之故令（也ゟ)(三)、又相府御共武士等、於此土戸外見物也、此後相府令着西面北方土戸外座兼儲小文高麗帖、給、鞠足等進出候北東方、依無其所不儲座候、只蹲居之躰也、又初度八人外不進出也、次主上出御黒戸東面令降立御、坤本左、次［ゝ］(ゟ)(三)第進立、按察大納言(三条西公保)・三条大納言(実量)・飛鳥井中納言・(松木宗綱)中御門中納言・別当・予・雅永朝臣、至極之後先入御、次人数立替、三条大納言・予・右大弁(日野資親)・雅永朝臣・資任(資茂)・夏久・重藤(資茂)・秀久、至極了各退入、次又令降立御、乾木右、次第進立、按察大納言・飛鳥井中納言・別当・予・重藤・秀久、至極之後入御、已上立御・入御之時、相府令降座給也、此後令置切馬道閉土戸、主上渡御泉殿、相府令参給、人ゝ和歌出来之後、飛鳥井中納言申事由、則被出御製、先被仰合納言歟、重之居御硯［筥］(ゟ)蓋置御前、相府令候端方給、読師按察大納言進御文台南方、次講師雅永朝臣已上講・読師事、飛鳥井中納言伺天気(仰)給之、参進、次飛鳥井中納言・中御門中納言・別当・予等進寄講師後、披講、御製五反、相府三反、自余一反、事了各退下、此後被進御劔、蒔絵野太刀、別当持参之、相府取之令置御前給、次一献之後、相府令退出給、於直廬改御直垂令出給了、予為御使持参御引出物於相府殿、御劔・御馬幷唐物等也、副女房折紙、令畏申給、則帰参申之、于時丑半刻歟、

参入人ゝ、

公卿

按察大納言公保、　三条大納言実量　飛鳥井中納言雅世、

中御門中納言宗綱　別当実雅、　予

四条宰相隆夏、此人詠歌之事人未知之、然而依相府仰参入、大略初度所作云ゝ、

右大弁資親、

此外大蔵卿為清(五条)、雖被定人数、依重服、祭御神事間不参也、

殿上人

雅永朝臣　持康朝臣(木造)　永豊朝臣(高倉)

資任　資益(白川)　俊秀(坊城)

教季(今出川)

此外雅親(飛鳥井)又依重服(雅親母永享九年五月二十五日没)不参、

此人ゝ可勤頭役也、

（『薩戒記』、底本は国立歴史民俗博物館蔵高松宮伝来『和歌部類記』校合本＝前田育徳会尊経閣文庫蔵『歌会記』＝ゟ、西尾市岩瀬文庫蔵『蹴鞠部類記』＝(三)）

◆十日、晴、室町殿御参内、内ゝ和哥御会有之、自今日被始之、御短冊三十首云ゝ、先有御鞠会、

（『師郷記』）

3 永享十年四月十六日内裏月次当座御会（月次御哥第二度）

◆十六日、晴、（略）今日内裏月次御歌也、頭役飛鳥井中納言一人申沙汰也、一頭八□資任□、其外ハ寄合て可申沙汰云々、一献二千疋被定云々、先有御鞠、其後御歌云々、源中納言参、室町殿無参内云々、

○

十七日、晴、源中納言参、御会之式物語、先一献間御短冊賦、各御前参取之、一両献了□、其人数御所様（後花園天皇）・按察大納言・三条大納言・飛鳥井中納言・中御門中納言・別当・中山宰相中将・日野宰相・雅永・」資任・賀茂人三人云々、次披講三十首御製□公卿以下一反□□、次一献、公卿御前祗候、於泉殿有一献、御陪善按察□□□（大納言カ）、公卿ハ殿上人役送云々、女中不候、殿上人末ニ候、御盃巡流之時、被召出飲云々、七献了人々退出、一献結構云々、室町□（歌カ）御歌も無詠進云々、

（『看聞日記』）

4 永享十年四月二十八日内裏月次当座御会（月次御哥第三度）

◆廿八日、晴、（略）禁裏月次御歌別当申沙汰一頭、源中納言参、先御鞠、次披講、一献如例、新衆大蔵卿為清（五条）卿、・雅親加参云々、源中納言一首詠云々、

（『看聞日記』）

◆廿八日、晴、禁裡和歌御会云ゝ、

（『管見記』）

5 永享十年五月十日内裏月次当座御会

◆十日、晴、（略）内裏今日歌鞠御会也、資任（烏丸）頭云々、一人頭也、源中納言参、

（『看聞日記』）

6 永享十年五月十九日内裏月次当座御会

◆十九日、雨降、（略）内裏月次御歌也、資益（白川）一人頭、申沙汰云々、源中納言・菊第少将参、

○

廿日、晴、昨日御歌御会深更事了、御人数皆参、但永豊朝臣不参、依雨無御鞠云々、

○

廿一日、晴、（略）内裏月次御短冊被出拝見、

（『看聞日記』）

（武井和人・石澤一志）